

書評

村田喜代史, 上甲 剛, 村山貞之 編

胸部のCT 第3版

埼玉医科大学呼吸器内科

金 澤 實

われわれ呼吸器内科医に最も親しまれている画像診断のテキストとして「胸部のCT」があり、医局員のデスクの書棚には必ずと言っていいほど本書がみられる。故池添潤平先生と村田喜代史先生が第1版を出版されたのが1998年2月10日であるから、すでに13年が経過した。手元にある第1版と比べると、厚さは倍近く、第3版は本文809ページとなり、英語名も「Ikezo's CT of the Chest」となった。

肺の解剖や病理変化を正確に反映し、さらには機能変化をも加味して画像読影をしようとする故池添先生の思想が貫かれているのが特徴である。それはⅠ. 検査法と適応、Ⅱ. 肺標本の作製法、Ⅲ. 肺・縦隔の正常解剖とCT像、と第1版から変わらずにCT検査の原理と基礎を丁寧に述べることから本書が書き進められている点に見てとれる。

今回の改定でまず目を引くのは、Ⅳ. 肺癌および肺良性腫瘍の

章で、改訂されたTNM分類に従って書き改められている点である。画像は3次元画像などを適宜用いており理解しやすい。とくに本書の特徴であるBOXと図表が巧みに使われて理解を助けている。

呼吸器内科の楽しみは腫瘍、感染症、免疫アレルギー疾患、気道疾患、肺血管疾患、さらには呼吸不全などの機能障害の病態が様々な組み合わせあって、つねにall-roundの知識力が要求されることである。たとえば本書のⅥ. 肺感染症の章を見ると、画像診断からどこまで病原菌診断に迫れるかという視点で記載されている。画像からの起炎菌の推定は見果てぬ夢(Impossible dream)ではあるものの、呼吸器内科医にとってはまさに挑戦しがいのある領域で、本書は楽しさを与えてくれる。

本書の第2の売りはⅦ. びまん性肺疾患の章である。臨床-画像-病理診断(Clinical-Radiologic-Pathologic diagnosis)の本領を発

揮している。間質性肺炎の診断に関し、我が国は世界でも最もレベルが高いと私は考えているが、その画像診断のリーダーが編者に名を連ね、自ら執筆していることからその内容の高さは折り紙つきといつてよい。間質性肺炎については特発性のみに限らず、膠原病肺や薬剤性肺障害や放射線肺炎まで丁寧な記載がされており、まさに推奨に値する内容といえよう。

最後の売りとしてⅧ. 肺機能イメージングの章を挙げたい。機能イメージングは今最も注目される分野の一つで、全国規模の研究会も立ち上がり新たな分野として期待されている。本書ではCT、MRI、FDG-PETが取り上げられ、機能イメージングの基礎と今後の発展性について述べられている。形態と機能は常に表裏一体であり、病態生理を評価する上で欠かすことができないが、そのために1章を割いた編者の先生方に敬意を表したい。

呼吸器疾患をこれから学ぶ研修医にとっても、また既に呼吸器を専門にしている医師にも、ぜひ勧めたい一冊である。

[B5 頁 832 2011年 定価
15,750円(本体15,000円+税
5%) MEDSi刊]